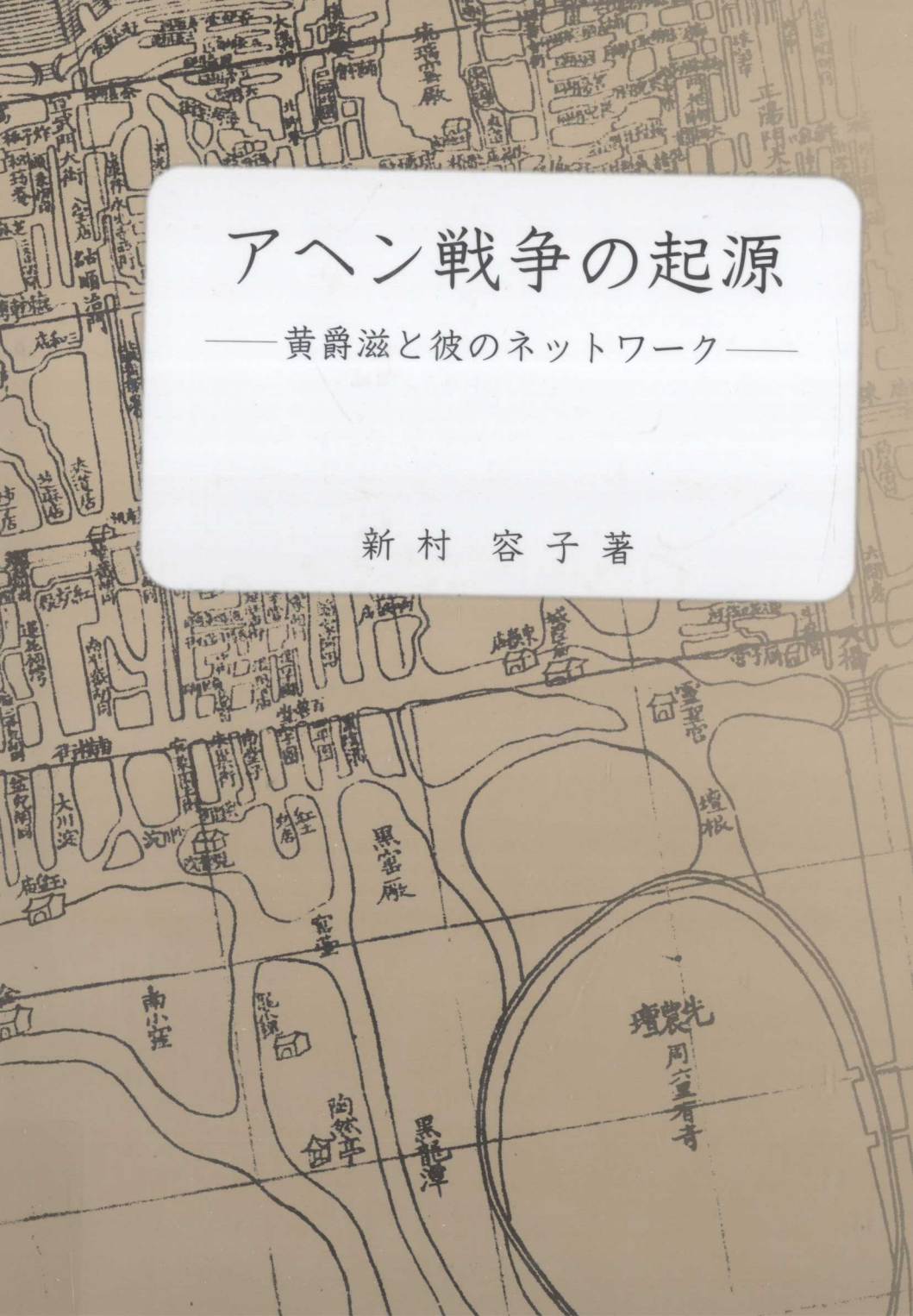




アヘン戦争の起源

——黄爵滋と彼のネットワーク——

新村 容子 著

アヘン戦争の起源

——黄爵滋と彼のネットワーク——

新 村 容 子 著

汲古書院

著者略歴

新村 容子（にいむら ようこ）

1949年、東京に生まれる。

1971年、東京外国語大学外国語学部卒業。

1979年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。

1991年、就実女子大学文学部史学科助教授。

2003年、岡山大学文学部教授。

現在、岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。

主な業績

『アヘン貿易論争』汲古書院、2000年

「『王立アヘン委員会』とモリソンパンフレット」『モリソンパンフレットの世界』東洋文庫論叢、2012年

アヘン戦争の起源——黄爵滋と彼のネットワーク——

平成26年1月3日 発行

著 者 新 村 容 子

発 行 者 石 坂 叡 志

製版印刷 富 士 リ プ ロ (株)

発 行 所 汲 古 書 院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
電話03 (3265) 9764 FAX03 (3222) 1845

ISBN978 - 4 - 7629 - 6512 - 8 C3022

NIIMURA, Yoko ©2014

KYUKO-SHOIN, Co., Ltd. Tokyo.

目 次

序 章	3
-----------	---

1. 本書の課題…… 3
2. 本書の論点と構成……17
3. 本書で用いる史料……21

第Ⅰ部 「黄爵滋ネットワーク」から「清流党」へ

第1章 「宣南詩社」に関する覚書	25
------------------------	----

はじめに……25

1. 1960年代、楊国楨・謝国楨・謝正光の研究……28
2. 1970～1990年代、中国における研究動向……34
3. 1992年、Polachek, James M.による新たな研究視角……35
4. 2008年、魏泉による新たな研究視角……41

おわりに……44

第2章 「黄爵滋ネットワーク」の形成——1826～1829年——	47
--	----

はじめに……47

1. 道光六年（1826）の黄爵滋主催の集会……48
2. 道光七年（1827）と八年（1828）の黄爵滋主催の集会……58
3. 道光九年（1829）三月二十八日「江亭雅集」……63
4. 道光九年（1829）五月・六月の黄爵滋主催の集会……70

おわりに……74

第3章 道光十年（1830）の3回の集会について	77
--------------------------------	----

はじめに……77

1. 道光十年（1830）四月九日の「江亭雅集」……	78
2. 道光十年（1830）六月十三日、潘曾瑩主催の集会……	81
3. 道光十年（1830）九月十九日の「江亭雅集」……	85
おわりに……	91
第4章 「黄爵滋ネットワーク」から「清流党」へ ——1831～1834年—— ……	93
はじめに……	93
1. 連年の大水害と「黄爵滋ネットワーク」……	94
2. 黄爵滋主催の集会——1832～1834年——……	104
3. 黄爵滋上奏とその反響——「綜覈名実疏」を中心として——……	120
おわりに……	127
第Ⅱ部 アヘン戦争と「黄爵滋ネットワーク」	
第5章 道光十五年（1835）黄爵滋「敬陳六事疏」・「片奏」について ……………	131
はじめに……	131
1. 道光十五年（1835）、北京における黄爵滋の名声……	132
2. 道光十五年（1835）九月九日の黄爵滋上奏 ——「敬陳六事疏」と「片奏」——……	135
3. 「敬陳六事疏」第6條・「片奏」の衝撃性……	140
4. 「黄爵滋ネットワーク」の情報と黄爵滋……	144
おわりに……	154
第6章 「弛禁上奏」再論 ……	157
はじめに……	157
1. 許乃濟「弛禁上奏」に関する先行研究と未解決の課題……	158

- 2. 「弛禁上奏」は呉蘭修「弭害」をいかに改訂しているか……161
- 3. 阮元と「黄爵滋ネットワーク」……168
- おわりに……173

第7章 道光十六年（1836）四月四日「江亭展禊」について ……177

- はじめに……177
- 1. 道光十六年（1836）二月と三月の小集……178
- 2. 道光十六年（1836）四月四日「江亭展禊」……182
- 3. 道光十六年（1836）九月九日「重九修禊」……191
- 4. 黄爵滋宛書簡と詩……196
- 5. 道光十六年（1836）の黄爵滋上奏文……198
- おわりに……200

第8章 アヘン戦争前夜における清朝中央の政策決定過程 ……203

- はじめに……203
- 1. 黄爵滋・許球・林則徐……205
- 2. 「重典」政策と両広総督鄧廷楨（1836～1839年3月10日）……213
- 3. 林則徐広東派遣の意味について……222
- 4. 張際亮と林則徐……228
- 5. 姚瑩情報と林則徐……231
- おわりに……233

第Ⅲ部 幕末日本人とアヘン戦争

第9章 塩谷宕陰『阿芙蓉彙聞』について ……239

- はじめに……239
- 1. 「阿芙蓉彙聞叙」について……240
- 2. 『阿芙蓉彙聞』各巻の内容紹介……243

おわりに……268

第10章 佐久間象山と魏源……271

はじめに……271

1. イギリスにいかに対抗するか——陸戦か海戦か——……273

2. 共通する主張——西洋式鉄砲・軍艦の導入——……276

3. 共通する主張——外国書の翻訳——……280

4. なぜ共感したのか……283

おわりに……286

終 章……289

1. 本書の議論のまとめ……290

2. アヘン戦争前夜の清朝社会と「腐敗」批判キャンペーン……297

3. 林則徐の政策と「黄爵滋ネットワーク」……299

4. イギリス艦隊の来訪と「黄爵滋ネットワーク」の人々……300

5. 当時の中国知識人はイギリス艦隊来訪をどのように認識していたか……304

注……309

文献目録……363

英文要旨……381

あとがき……393

索 引……397

アヘン戦争の起源

——黄爵滋と彼のネットワーク——

序 章

1. 本書の課題

本書の書名『アヘン戦争の起源——黄爵滋と彼のネットワーク——』には、Chang Hsin-paoの古典的著作 *Commissioner Lin and the Opium War* [Chang 1964] に対するアンチテーゼとしての意味が込められている。アヘン戦争を理解するために重要な人物は林則徐ではなく黄爵滋であり、清朝の政策決定過程における黄爵滋と彼のネットワークの役割を考察せずして、林則徐広東派遣に至る中国の動きを理解することはできない、というのが本書を通じて私が主張したいことである。

Chang Hsin-paoの古典的著作は言うまでもなく、従来のアヘン戦争研究は圧倒的に林則徐に焦点をあててきた。中国や台湾の諸研究において、その傾向は顕著である。林崇墉 [1976]、楊国楨 [1995]、林慶元 [2000] などによる林則徐伝、魏応麒 [1935]、来新夏 [1997] [2011] などによる林則徐年譜、蕭致治による研究指南書 [1995] や研究書 [1999]、枚挙にいとまのない林則徐関係の論文、2002年における『林則徐全集』の刊行など、林則徐研究は現在に至るまでなお盛んである。日本においても、田中正美 [1979]、大谷敏夫 [1986] [1995]、井上裕正 [1994] などの研究があり、林則徐はアヘン戦争研究の中心的人物であり続けている。

林則徐に焦点をあててアヘン戦争を考える時に必ずぶつかる最大の困難は、林則徐は広東に派遣される1年前まで、アヘン密輸入問題を含む対外問題に、ほとんど関心を向けていなかったことである。確かに江蘇巡撫在任中（1832～1835）の道光十二年（1832）に林則徐はイギリス東インド会社管貨人リンゼー（Lindsay, Hugh Hamilton）の中国沿岸航海に神経をとがらせ、ロード・アマースト号（*Lord Amherst*）を駆逐している⁽¹⁾。また、道光十三年（1833）四月初六

日の上奏文「会奏銀昂錢賤除弊便民事宜折」において、江蘇・浙江両省において銀価格が高騰していることに警告を発する給事中孫蘭枝上奏に意見を述べた際に、銀価格高騰の最大の要因をアヘン密輸入による紋銀の流出に求め、内地におけるアヘン生産を解禁して銀の流出を止める方法を提案している⁽²⁾。しかし、道光十年代（1830年代）を通じて林則徐の圧倒的関心は、揚子江中・下流や淮河流域の大水害、治水事業、米価、漕糧、税糧などにそそがれている⁽³⁾。

道光十八年（1838）閏四月十日に、鴻臚寺卿黃爵滋が吸煙者を死刑にすることを提案した「請嚴塞漏卮以培國本疏」⁽⁴⁾を上奏し、同年五月初七日に湖広総督林則徐が黃爵滋への賛成上奏「籌議嚴禁鴉片章程折」⁽⁵⁾をおこなう。林則徐がアヘン密輸入問題に積極的に関わるのはこれ以後である。黃爵滋の影響を受けてアヘン問題に関心を抱くようになったという理解もあり得る。おそらくそうであろう。しかし、それならば、黃爵滋と林則徐との交友関係はどうであったのか。「宣南詩社」において2人は交流していたという議論は実証的に成立し得ない（1章参照）。それでは2人はいかなる関係にあり、いかに連携していたのであろうか。この問題はいまだに未解決のままに残されている。

以上に述べたごとく、林則徐を焦点としてアヘン戦争に至る中国側の動きをとらえようとする試みは壁にぶつかる。しかし、黃爵滋の動きを焦点とするならば、4、5、8章で詳述するごとく、彼が、1830年にはじまる連年の大洪水という危機的状況において、地方官の「腐敗」を告発する「清議」によって名声を獲得し、1834年のネピア事件⁽⁶⁾を契機に「広東の腐敗」に目を向けるようになり、道光十五年（1835）に外国人アヘン商人と中国人アヘン商人⁽⁷⁾を「重典（死刑）」に処する政策を上奏し、最終的に、その政策を「廷臣會議」において正式に採択させることに成功し、政策執行代理人として林則徐を広東に派遣させる過程を、一貫した流れとして理解できるのである。なお、「清議」とは、「北京の監察官僚を中心とする対外強硬論を指す」[吉澤1997：62頁のち2002：82頁]という理解が一般的であるが、本書において私は「清議」を、しばしば対外強硬論として現出する「腐敗」批判という意味で用いる。「清議」

が対外強硬論として現出する場合も、外国そのものへの攻撃よりもむしろ外国に妥協的な官僚への攻撃として現出する。外国に弱腰であるというモラル違反＝「腐敗」を攻撃しているのである。

歴史家たちは、特に中国の歴史家たちは、なぜ黄爵滋ではなく、林則徐に大きな関心をよせてきたのであろうか。その理由は二つあると考えられる。その一つは、20世紀以降の世界において、アヘンは医療用以外の使用を禁止される毒物であるという認識が確立したことであろう。アヘンは毒物であるという認識は、イギリス人からアヘンを没収して廃棄処分した林則徐を無条件に正当化する。もう一つの理由は、広州の外国人商人から2万箱以上ものアヘンを没収して処分した林則徐は、アヘンを利用して中国「侵略」を企むイギリスへの民族的抵抗の象徴としての意味をもったことである。以下、歴史家たちが林則徐に関心を寄せることになった二つの理由について検討を進めよう。

1) 16～19世紀中国社会はアヘンを必要とする社会であった

従来のアヘン戦争研究において林則徐のみがクローズアップされてきた理由の一つは、20世紀以降の世界において、アヘンは医療用にのみ使用が制限される毒物であるという認識が確立したことであろう⁽⁸⁾。アヘンは毒物であるという認識は外国人商人からアヘンを没収して処分した林則徐を無条件に正当化する。しかし、少し歴史を遡れば、アヘンは世界のさまざまな地域の人々の生活の中で多様な意味を持っていた⁽⁹⁾。世界には多様なアヘン文化が育まれてきたのである。現代のわれわれのアヘン認識は極めて視野の狭いものであり、それは19世紀末以降アヘン貿易反対運動を推し進めてきたイギリスのクエーカー教徒や福音主義諸派らの考え方、及び、彼らと価値観を共有するアメリカの外交戦略が作り出したものである、と言えるのではないか⁽¹⁰⁾。

中国におけるアヘン吸煙を文化としてとらえなおす大胆な問題提起をおこなったのは Zheng Yangwen [2005] である。彼の議論をやや詳しく紹介しよう。Zheng によれば、アヘンは元代までは咳や下痢に処方される薬として用いられていたが、明代以降、アヘン消費文化に大きな変化が起きた。媚薬として、

まず宮廷で、さらに上流士大夫層の間で盛んに用いられるようになった [pp.12-14]。医薬から媚薬への転換はアヘン消費の拡大に重要な意味を持った。明末にはアヘン消費文化にさらなる転換が訪れる。喫煙の大流行を背景として、タバコにアヘンを混ぜて吸うことが始まった。タバコにアヘンを混ぜる習慣は急速にアヘンそのものの吸煙に転換していった [Edkins 1898 : p.30] [王宏斌 1997 : 22~26頁] [Zheng 2005 : pp.58-59]。

当時の中国におけるアヘンのイメージは、毒物とは正反対の、洗練された、上品で優雅で贅沢なものであった。アヘンはまず宮廷において、次に中国文化の中心的な担い手である上流階級の士大夫層に承認された [Zheng 2005 : pp.41-55]。士大夫層の心をとらえたアヘンは、1830年代半ば、すなわちアヘン戦争前夜、下級の士大夫や一般大衆にも拡がりはじめ、広く支持されていく [Zheng 2005 : p.78, p.141]。19世紀末、アヘン吸煙がいかに一般大衆の心をとらえる娯楽であったかは、上海の煙館についての高洪興の記述に示されている [山田 1995 : 137~142頁]。

問題は、なぜ中国の人々は娯楽としてアヘン吸煙に価値を見出したのか、であろう。おそらく、さまざまな複雑な要因がからんでいる。Zheng Yangwen はアヘン吸煙の拡大を、中国社会の社会文化的文脈の中で説明している。清代の中国は、人々に抑圧と精神的緊張を強いる社会であった。人々は緊張からの慰めをアヘンに求めた。なぜ、酒ではなくアヘンであったかという理由は、飲酒は人々をしばしば暴力行為などの社会規範の逸脱に駆り立てるが、アヘン吸煙は社会的逸脱行為を伴わないことにある、という [Zheng 2005 : pp.60-61]。

確かに、当時の士大夫たちは、複雑な人間関係の中で常に自己の立ち位置を確かめ、社会的に逸脱しないよう精神的緊張を強いられていたであろう。また、貧しく弱い立場の人々にとって、抑圧に満ちているだけでなく、痛みで満ちた社会であった。苛酷な労働による痛み、病気による痛み、飢えの痛み、寒さの痛み。夫を亡くした後、小屋に閉じ込められて死を待つ女性の痛み、等々。Zheng Yangwen は、乾隆年間に、若くして寡婦となった非常に裕福な家の女性が、10年以上にも及ぶ隔離された庵室での日々において、アヘンに僅かな慰

めを見出した事例を紹介している [p.117]。アヘンは boredom killer としての意味も有したのである。アメリカ国務省が組織したフィリッピンコミッション (Philippine Commission) の報告 (1905) は中国にアヘン吸煙が拡がった背景として、豊かな人々の退屈、貧しい人々の痛み、を指摘している⁽¹¹⁾。

ロンドン会 (London Missionary Society) が北京に開設した病院の記録によれば、1860年代当時、中国の医師たちは、病人に対して非常にしばしばアヘン吸煙を勧めたという⁽¹²⁾。理由がよくわからない痛みや苦しみに対してアヘン吸煙は大きな効果を発揮した。

18～20世紀中国はほとんど定期的に水害や旱害に襲われ、深刻な飢饉に直面した。飢饉の際に人々は食物よりもむしろアヘンを渴望した。1877年の『海関報告』によれば、当時中国北方は大規模な飢饉に襲われ、穀物生産もアヘン生産も潰滅的であった。50%以上の人々が餓死する深刻な状況の中で [趙英霞 2005: 93頁]、飢餓の苦しみを緩和してくれるアヘンに対する需要は高まり、輸入が増えたという⁽¹³⁾。私は、アヘン戦争前夜の1830年代に中国のアヘン密輸入量 (5章表1参照) が急増した背景には、1830年から1835年まで長江流域・淮河流域を襲った連年の大水害 (4章参照) が影響しているのではないかと考えている。

私は、16世紀以降20世紀にいたる時期の中国社会は、アヘンを必要とする社会であったと考える。アヘンは当時の中国において、最高の娯楽としての意味、病氣治療としての意味、さまざまな社会的緊張やさまざまな痛みを忘れさせる慰藉としての意味など、多様な意味を持っていた。現在の私たちが麻薬中毒者に向ける差別的な視線を投影させて当時のアヘン吸煙者を見るべきではないであろう。そうである以上、黄爵滋や林則徐がアヘン吸煙者に対して死刑という厳罰を適用したことは、中国のあらゆる階層の人々にとって災難以外の何ものでもなかったのではないかと。吸煙者に対する死刑を主張した道光十八年 (1838) 閏四月十日の黄爵滋上奏「請嚴塞漏卮以培國本疏」に対して、直隸総督琦善 (1831～1840在任) は次のように反論している⁽¹⁴⁾。

立派な人物の子孫であり、穏やかで雅やかな人物で、富もあり、善行をお

こない、品行方正である人、あるいは、監生や挙人など大きな才能を持っている人、あるいは幕友や書役で自己をわきまえて仕事に励んでいる人、あるいは立派な婦人で禁令を知らない人、あるいは節を守って人目のつかないところに閉じこもっている寡婦、さらには農民、労働者、商人などで分に安んじて己を守っている人々、これらの人々が1回でもアヘンを吸食すれば、法によって処罰されるならば、縛られた人々が道にあふれ、牢獄には収容する余地がなく、刑の執行を待っている間に衰弱死する人々は何千人、何万人にもなるであろう。

琦善が述べているように、アヘン吸煙は、19世紀半ばの中国社会において、全階層に拡がりつつあった。あらゆる階層に広まっているアヘン吸煙者を死刑に処することは、多くの善良な人々を苦しめることになるという琦善の主張は公平であると思う⁽¹⁵⁾。

2) 民族的抵抗の象徴としての林則徐

イギリスの侵略に抵抗した林則徐という中国人の歴史認識は、Zheng Yangwenによれば毛沢東の政治教育の所産であるという。日中戦争は、関東軍がアヘンを利用して中国を侵略する戦争であった。日本との戦いの記憶を1840年まで遡らせることによって、林則徐のアヘン追放運動は、イギリスの侵略から中国を守る戦いとしてイメージされるようになったという [Zheng 2005 : p.195]。

しかし、民族的抵抗の象徴としての林則徐像の成立は毛沢東よりもはるか以前にさかのぼるのではないだろうか。林則徐自身、イギリス艦隊来訪の理由を、イギリスの中国に対する領土的野心によって説明している。道光帝は、イギリス艦隊来訪直後の道光二十年（1840）七月二十三日に、「上年の林則徐等の査禁煙土」は「措置失当」であるので、調査の上「重治其罪」をおこなうという上諭⁽¹⁶⁾を下した。林則徐は、道光二十年（1840）八月二十九日に弁明書とも言える上奏「請戴罪赴浙図勦片」⁽¹⁷⁾をおこなう。林は、その中でアヘンの取り締まりをおこなうことの必要性を再度主張するとともに、「夷兵之来」は「禁煙」によって起きたのではなく、「以前からアヘンを内地に持ち込んでいたイ

ギリス」は一貫して「禍心」を包蔵していたのであり、遅かれ早かれ襲来していたはずであると述べている。

また、安徽省阜陽県の拳人朱鳳鳴は、道光二十一年の会試受験に上京した際に「平夷策」8カ條を上書した⁽¹⁸⁾。彼はその第1條「賊謀之宜伐也」において、

英逆の窺伺することすでに一日にあらず。鴉片烟はただ借詞のみ。入貢の時に常に必ず画工をともない、わが山川の形勢を描かせていた。彼の鴉片を焼かずとも、平穩に終わるはずがなかったことがわかる。

と述べている⁽¹⁹⁾。イギリス艦隊来訪の衝撃に直面した時、イギリスは以前から中国に対して領土的野心を抱いていたのであるという民族的危機意識が表明されたことは重要であろう。

イギリス艦隊来訪とはほぼ同時に罷免された林則徐は、その後の清朝政府の軍事的敗北の大きさ⁽²⁰⁾と反比例して、イギリスに断固たる態度で対応したヒーローとしてのイメージを成立させることになったのではないか。蔣廷黻はアヘン戦争当時の士大夫層が抱いていた林則徐像を次のように語っている⁽²¹⁾。

彼（林則徐）は百戰百勝であった。彼の用いた戦法は中国古来の戦法であった。惜しいことに奸臣琦善が英国人の賄賂を受け取って彼を駆逐してしまった。英国人は林が広東を去る前には広東を攻撃しなかった。林が去った後に攻撃を始めた。それゆえに、士大夫たちは中国の失敗は中国の古い戦法にあるのではなく、奸臣が国を誤ったためであると考えた。

(())内は筆者による補足ないしは説明。以下同じ。)

蔣廷黻によれば、当時の士大夫層は、林則徐が罷免されなかったならば、中国はイギリスに敗北することはなかったはずであるという認識を持っていた。民族的英雄としての林則徐像は、イギリス艦隊到着後における林則徐罷免を契機として、中国知識人の間に形成され始めたと考えられる。

イギリスの軍勢力が強大であればあるほど、イギリス人にアヘンの没収を迫り、イギリス人を澳門から退居させ、強硬な姿勢を貫いた林則徐の名声は高まっていく。このようにして、アヘン戦争をイギリスに対する民族的抵抗としてとらえる歴史観が形成されるとともに、1839年に林則徐を広東に派遣させた黃爵

滋と彼のネットワークの政治的活動とその意味は歴史の闇に消えていった。イギリス艦隊の来訪を転換点として、中国知識人の認識において、黄爵滋から林則徐へと主役が交替したのである。

加藤陽子は、間宮陽介の「歴史家の仕事は歴史の闇に埋没した作者の問いを発掘することである」という言葉〔間宮 1999：60～61頁〕に考察を加え、歴史認識の断絶という興味深い問題を指摘している。「自然災害・画期的な発見・戦争などの前と後で、人々の認識がパラダイム変化を起こす事によって……その時代に生きた人であるならば理解可能な「作者の問い」＝思索の跡が、決定的に忘却され、理解不能となる」事態が起こることがあるという〔加藤 2005：ii 頁〕。アヘン戦争前夜の黄爵滋の「思索の跡」は、イギリス艦隊来訪後に当時の知識人たちの認識がパラダイム変化を起こしたことによって忘却され、後世の人々には理解不能となってしまったのではないか。

黄爵滋は、道光十五年（1835）以降、アヘン密貿易人を外国人を含めて「重典（死刑）」に処すべきであると声高に主張し続けた。彼の主張はなかなか皇帝の採択を得られなかったが、道光十八年（1838）九月七日の「廷臣会議」においてようやく清朝政府の政策として採択された。新たな刑罰規定「新例」の制定である。そして、林則徐が「新例」政策の執行人として広東に派遣される。この一連の過程において、黄爵滋は何を考え、何を実現しようとしていたのだろうか。本書における私の狙いは、林則徐をイギリスの「侵略」に「抵抗」した英雄とみなす「民族的」歴史観の背後に忘れ去られてしまっている黄爵滋の思想と行動を、その当時の意味においてとらえることである。それは、アヘン戦争の起源についての見失われた論理を探すことでもある。それはまた、アヘン戦争を、イギリス対中国という対抗軸でとらえる思考の枠組みを解体する試みでもある⁽²²⁾。

従来のアヘン戦争研究における林則徐に対する高い評価は、アヘンは毒物であるという20世紀的前提から出発し、林則徐をイギリスの「侵略」への民族的抵抗の象徴とみなす中国の歴史認識を我々が受け入れてきたことに立脚している。中国の人々が、民族意識にもとづいて林則徐を評価することは、理解でき